令和の時間

令和が始まって 2 か月が経った。いかがお過ごしだろうか。

新しい元号の発表を待つ期間は何故かそわそわし、実際に発表されたその字のかたちや響きに不思議な気持ちや違和感、あるいは軽い興奮も感じた人も多いはずだ。かつて「平成」が発表された瞬間を思い出して比較した人もいるだろう。

元号が切り替わる瞬間においては、カウントダウン・イベントに参加する人もいたと思う。(とはいえ、表示される「年」が分かりやすく改まる年越しのイベントと違って、手元の時計をみても、元号それ自体がデジタルの画面で切り替わる瞬間があったわけではない)

また、じっさいにはまだ未体験の人も少なくなさそうだが、「令和」という新しい元号をはじめて書いた瞬間のことはどうだろう。筆者は国立大学に勤めているので、すでにもう何度となく「令和」と書いている。「令和一年」ではなく「令和元年」と書くのだ。あ、いま自分、「令和」と書いた！と思い、ちょっと照れくさいような、奇妙な感覚になる。ただ R にマルをして「1」を書き込む経験のほうは、まだない。

そうした妙な高揚感が冷めてゆくのには、そんなに時間はかからなかった。「令和」が当たり前になり、いつしか誰もそれに違和感を覚えなくなる。2 ヶ月も過ぎてしまえば、もうすでに、誰も「令和」のことをいう人はいない。そうやって「令和」が始まってゆくのだろう。(発表直後には、「命令の令か！」といって怒った人も少なくないそうだ。この場合、「命令」の令よりも「令嬢」や「令室」を思い浮かべるのが自然だと思うが、「令嬢」や「令室」が死語になりつつあるということだろうか……)

そんな体験を、この国では多くの人がしたのである。みな同じようなことを考え、似たような感想を持った。そしてそれを誰かと共有したいと願ったために、ネットワーク上でも書店の書棚でも、ひとびとの素朴な感想文や関連書が溢れかえり、賑やかな感じになった。そしてそれもつかの間のことであり、「平成の終わりと令和の始まり」は、別の情報にあっという間に押し流されてゆく。

また、元号の非効率性についてもさんざん論じられたと思う。令和と西暦、令和と平成・昭和の変換には、いちいち足し算や引き算が必要になる。「昭和 35 年に生まれた人は令和 3 年に何歳になっているでしょう？」などという計算も、西暦であれば一発でできるのに、元号で計算しようとすると煩雑だ。一方、2000 年以上の歴史を誇る西暦は、そのあいだに人類史的なできごとのほとんど（もちろん全てではない）を収めていて守備範囲が広い。

とはいえ西暦とて元来ローカルなものであったことには変わりない。西洋文化の影響力を背景に世界標準になっているというだけである。そしていったん標準を獲得してしまえば、その利便性から人びとは離れにくくなってしまう。これが西暦の地位を支えている。

元号がそうした非効率性をはらんでいても、今回の改元において、元号廃止にまで議論が至ることはほとんどなかった。改元を年越しイベントのように無邪気に経験した人たち、非効率性を感じ、めんどくさいと思いつつも廃止を主張するほどではなかった人たち、さ

らには完全に無関心・無感情な人たちなどが数多くいて、逆にその維持を積極的にいう人たちは、それほど多数ではなかったようにみえた。しかし彼らは少数ながら熱心な存在である。彼らの存在感が制度の維持に積極的に働いたということだろうか。熱心な少数派に対して全体社会が払う配慮は、「熱心な右」という少数者に対しても同じだということなのだろう。こうしたことは、別に元号に限ったことではなく、多くの社会制度もそうである。やめる積極的な理由がなければ、あえてやめることはない。

こうした一連のできごとや私たちの体験はいったい何を意味しているのだろうか？　もう少しこれを考えてもよいはずである。そのためにも、「令和」が自然になるにつれて消えてゆく感想、忘れてゆく感情を、もう少し異化してみてはいかがだろうか。

改元の体験は、令和元年に生きる自分たちにとっては当たり前のものでも、歴史的かつ希有な体験（historic であり historical でもあるという意味で）だったのは確かである。私も体験者のひとりとして、語ってみよう。

自分自身についていえば、「令和元年」などというと、まるで SF の世界の中にいるように感じたものだ。現実の世界から分岐し、別の歴史を歩んだ架空の未来社会の日本にいるかのような感触が、いっしゅん湧き上がった。

そしてじっさいに自分で「令和」と書いたときの照れくささ、というのは、そう書いたことで架空の歴史時間に自分が吸い込まれたように感じ、それでいてすぐに「そんなはずないじゃん」と身を引き剥がす、そうした瞬間に起こった感情だったと思う。

歴史を学んでいると（学んでいなくてもそうなのかも知れないが）、現在が、他でもありえた多様な可能性のたった一つでしかないことに気づかされる。歴史研究に「if」は禁物だそうだが、改めて考えてみれば面白いことが多い（赤上裕幸『「もしもあの時」の社会学』筑摩書房、2018 年）。もちろん他でありえたという空想には、いまの自分（たち）にとって都合の良いものだけではない。かなり都合が悪いものもある。

繰り返すように、自分の場合、新元号に対してつかのま覚えた違和感は、すぐに「照れ」で覆い隠された。そしてじきに、そのこと自体、忘れ去られる（はずである）。あれは一体なんだったのだろう？　とても大事なことだったように思える。

一方で、それなりに愛着のあった「平成」は、自分の意思とは関係なく、終わってしまった。その終わりはすでに予告され、心の準備はできてたはずであるにもかかわらず、である。その終わりのあっけなさに関する感慨のようなものは確かにあった。人の死に似ている部分があるかも知れない。

その程度には、「平成」という元号が覆う時間は、私の愛着、そしてその根拠としての私の生きられた時間に関連を持っていたのだろう。そうした感慨において、ある時間のまとまりをみるラベルとしての元号はやはり意味を持っている。

一方、「自分の意思とは関係なく」という部分もよく考える必要がある。自分と観念的な次元（だからといって重要ではないとはいっていない）でのみ繋がっている存在（＝国民

の統合の象徴としての天皇）の身体的事情に基づいて決められた改元に、戸惑う気持ちがなかったわけではない。私の人生にほぼ関係のないところで決められ、違和感とともに始まり、それなりの愛着が生まれ馴染んだと思ったら今度は勝手に過ぎ去ってゆく「平成」。

ただ逆説的なことに、なんらかのライフイベントでもなければ普段はまとまりとしてみえることなどほぼない自分の日常の時間は、たしかに元号の終焉が契機となって、あるまとまりとして見いだされたわけだ。

改元や元号それ自体が統治の技術であったという過去の経緯を踏まえれば、こうしたことは、権力（強制力）や支配との関連において考えるべき問題でもある。これも少数ではあると思うけれども、今回の改元に際して、かなり激しい敵意を新元号に向ける人もいた。自分の生きる時間を自分には関係ない元号によって勝手に区割りされてたまるか、というわけである。確かに元号は、私の時間を理不尽に切断してしまった。

ただ、こうも考えるのだ。元号のこの理不尽さにおいて、「わたし」や「かれら／わたしたち」は、自らの体験とより大きな歴史とを結ぶ回路の一つを持つのではないかと。

つまりこういうことだ。3 回ほど前の回でも書いたように、自分の時間と歴史の関連性を表明する場合、昭和であれば、「私の昭和史」と書く必要があった。「私の」という限定に表れているのは、「昭和」という元号の拘束力が歴史を語るうえで強大すぎたということである。一方「平成史」であれば、（その時代的「近さ」もあるけれども）わざわざ「私の」を付ける必要がない。むしろ暗黙の前提として、「平成史」はみな、「私の平成史」となっている。「私の」時間を圧倒し、すりつぶしてゆくような強大さが、「平成史」にはない。それが「私の平成史」が語られない（語られにくい、あるいは語ったとしてもなぜか価値のないように思えてしまうという）ことの理由だろう。

一方、西暦に関していえば、改元が起こらないし、一瞬の違和感が浮かび上がってくる機会もない。そして西暦が維持されているのは、便利だからということに尽きる。キリストの誕生を「西暦 1 年」と定めたことから生ずる「意味」は、突き詰められてはむしろまずいようなものである。

そして西暦が使われ始めたのは（もちろん）西暦 1 年ではない。中世になって、改めて「西暦 1 年」を過去に見いだしたのである。元号とは違う種類の人工性がここにはある。そして西暦は終わることがない。そしてまた、元号のような意味で「始まった」こともなかった。

一方、元号は終わることと始まることを繰り返す。そうした（基本的には）無意味な繰り返しに対して、人々が時間の中で生きてゆきながら、意味を与えてゆくのである。

そう考えた時、元号は、人びとそれぞれのメモリー、あるいは社会的なメモリーの使い方をめぐるオプションの一つなのだと考えることができる。そのリソースの配分をめぐるプリファレンスは多様である。それぞれにおいて自分で決めればいいということである。

逆にいえば、あくまでもそれは文字通りプリファレンス（選好）なので、その使用が強制されてしまって鼻白むことがないわけではない。元号のせいで煩雑な計算が強制される

場合もある。とはいえ、その程度の煩雑さで、自分を超えた時間の流れにアクセスすること（この連載で「歴史を体感すること」としてきたもの）を可能にする経路のひとつが維持できるのであれば、無駄なものではないと思う。